

英知通信



大園義興副学長追悼特集号

昭和51年7月1日

英知大学

No.17

大園義興副学長帰天

英知大学副学長、大園義興教授は箕面市のガラシア病院に入院中のところ、薬石効なく、ついに去る五月二十八日午後六時三分、肝硬変のため逝去せられた。享年五十三歳。

大園教授は、昭和四十二年より九年間、フランス文学科において仏語を担当するとともに、西洋宗教学思想史、教会史、宗教学などを講義。さらに園田カトリック教会の主任司祭として司牧を担当するかわり、全国の学校、教会、修道院に招かれて講演。また「声」誌に健筆をふるい貴重な論文を発表するとともに百合学院高校においても宗教を担当するなど広汎多岐にわたるその功績は名実ともに高く評価されている。

故大園教授の葬儀は、五月三十一日午後二時半より園田教会においてカトリック大阪司教区と英知大学との合同葬としてしめやかにとり行われ、田口芳五郎枢機卿、安田久雄補佐司教ほか七十二名の邦人、外人司祭による共同ミサが捧げられ、本学教職員、事務職員、学生はもとより全国各地から約一千名の人々がこれにあずかり故人の冥福を祈った。

故人の功績と遺徳をたたえて岸英司学長が追悼説教を約三十分に行わって行った。

故人の遺体は同日午後六時、甲山の司祭墓地に沈みゆく夕陽を浴びる中で、ロザリオの祈りをこめ聖歌で野辺の別れを惜しみつつ、静かに埋葬された。

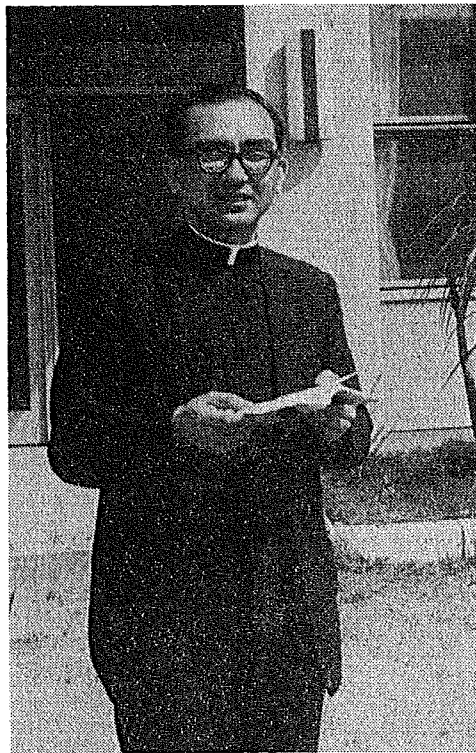
深い悲しみに包まれている。学長広報室では、故人を慕う多くの方々のご協力を仰ぎながら、ここに

大園先生を偲んで

学長 岸 英 司

英知大学副学長大園義興先生は去る五月二十八日午後六時三分ガラシ

に大園義興副学長追悼号を刊行することになった。大園教授のご靈魂の永遠の安らぎを祈りつつ。



ア病院にて死去されました。先生は最後まで、病を克服して生きる希望に生きておられました。神の摂理は先生をお召しになることだったのです。あまりにも短かった人生、あれほどの語学力と学識のすべてを死ははるかかあなたに持ち運んでしまいました。

先生は司祭として教会のお仕事をされていましたが、晩年は結局大学でのお仕事を中心でした。英知大学には昭和三十九年四月から講師とな

長となられ、英知大学の発展に寄与されました。

大学にとって忘れることのできないことの一つに英知大学歌があります。英知大学歌は確か英知大学創立十周年の年に発表されました。それに先立つ三年位前から、二年間に渡って大学教職員、学生から公募し、学生からは教編の応募があり、岡田利兵衛先生に審査して頂きましたが大学歌として採用するための格調に欠け、二年間も募集しましたが果し

ませんでした。岡田先生は奥の細道研究の権威であられ、先生に作詞をお願いしたこともありましたが実現しませんでした。それで私は遂に大園先生に作詞をお願いしたので。ところがどうでしょう。先生は確か一日で作詞をされたと思います。ノートの切れはしに四つの歌を書いたものを私に示されました。私はすぐ気に入り、これを岡田先生にみて頂きました。先生から賞讃のお手紙を頂きました。この歌は音楽のメルオー先生が作曲され実現しました。大園先生の葬儀の日にはメルオー先生がオルガンをひかれましたが、メルオー先生は葬儀の間、大園先生の作詞された、英知大学歌のメロディーを流され、今更の如くこのことを思い出したのでした。

大園先生は旧制高校(三高)時代からフランス語を勉強され、京大、上智大を出てから、フランスのバリーカトリック大学に留学されたこともあって、フランス語の語学力は抜群でした。それで大学でのフランス語講読などの程度が高く、学生は悲鳴を上げていました。フランス宗教思想史は先生の独壇場でした。宗教史に深い関心があり、神学科では、宗教史、教会史をずっと教えました。また一般教養では、私と共に「宗教学」を担当されました。

大園先生の宗教研究の幅は非常に広く、東洋と西洋にまたがり、両方の宗教史を講義していましたが、殊に日本精神の研究は関心が強く、万葉集を特に熱愛されました。カトリックの月刊誌「声」によく「万葉の旅」と題して連載しました。

大園先生は司祭ではありませんでしたが

自らを神学者として考えることは一度も無かったと思います。にも拘らず、私が少しばかり葬儀の時の告別説教の中でふれたように、先生は神学者でした。先生の神学はいわば「一粒の麦の神学」でした。これは多年にわたる先生の日本人の精神性、霊性の研究と自らの信仰による結論でした。先生はまことの福音の立場に立っていたのです。マタイの福音書第十三章にある「種まき」のたとえにおいて、すでにあらわれている霊的土壌の問題を取り上げました。

キリスト教の根本真理である「Incarnatio」インカルナチオ、普通は託身とか受肉とか訳されるこの真理を東洋的に「化肉」と表現されました。先生は「言葉は肉となりて我らのうちに住み給えり」というこの真理の一点にのみ立つに至ったのです。現代的思想家として関心を集めている、テイヤール・ド・シャルダンの進化論的宗教論の中心はやはりインカルナチオなのです。

大園先生の化肉論はテイヤールのそれが宇宙的であったのに対して、大地的であります。大地の中に深くはいつてゆくのです。

先生によれば、福音が肉となるのはまだ不十分であって、更に土の中に死んで土と化する「化土の神学」を説いたのです。それはいわば自らの信仰が日本の精神的土壌の中で死ぬことだったのです。自分の生命を与えることだったのです。先生はここに教会の使命を見だし、「声」に発表されたその熱烈なる叫びの中で二度「一粒の麦」に言及しています。

先生の最後に到達された神学はい

わば「一粒の麦」の神学でした。私はいま、全心をこめてこれが正統なる神学であることを確信しています。

先生の叫びの一節に聞きまじゅう。

*Le mystère de Jésus -
Jésus est dans un jardin,
non de sabbat
comme le premier Adam,
où il se perdit
et tout le genre humain,
Mais dans un de supplices,
où il s'est sauvé
et tout le genre humain.
(Pascal: Pensees 553)*



の短かい生涯をもってこの原理を示された。彼は十字架の上の死に至るまで卑しきものとなり給いしにより、その名は天にまで上げられたりと」(「日本における福音化の諸問題」「声」十月号十九頁)。

先生はこの言葉通り、土の中に深くはいることによって、キリストと共に、天にまで高く上げられることでした。

先生が亡くなられてから、しばらくたったある日、最近では先生が殆んど使われることになかった副学長室を私は訪ねました。部屋の中は生前と変わりなく整頓されていました。その部屋の中で私は一つの大きな額を発見しました。それは右側にロダンのパンセという一八八六年制作の大石像のカラー写真が入れられ、右側にはパスカルのパンセの中の有名な箇所、五五三

番「イエズスの秘義」の一節がフランス語と日本語で先生の自筆で次の様に書かれていました。

イエズスは園におられた。それはアダムが自分をほろぼし人種をもほろぼした楽しみの園ではなく苦しみの園であった。

そこで主は自分を救い、またすべての人種をも救いたまうた

パスカルのパンセ・五五三番

私は先生の到達された最後の立場が、いわば「一粒の麦の神学」「化土の神学」であったと言ったのであるが、このパンセの一節が先生によって生前より愛され、いわば自分の変らない座右の銘として選ばれていることを知らされて、この私の考えが正しいと感じています。

先生が生涯の間求めたものは楽しみの園ではなく、苦しみの園であったのです。その苦しみの園はイエズスの苦しみに給うた救いの園であったのです。

化土を主張し、遂に死によって化土を成就された先生、イエズスの苦しみの園における苦しみに自らの病苦において、做われた先生、現代を高く超えて飛翔した先生は、同じ「声」に書かれたそのご自身の言葉通り、フェニックス(不死鳥)の如く私達のうちに生き続けることでした。

一九七六年六月二十八日
先生の死去一カ月の日に

大園先生を慕って

井上武

(フランス文学科卒業生)
(百合学院勤務)

大園先生については、私たちがまだ文法も単語も知らなかった一回生の時からフランス語のテキストを手渡されドッキリさせられたことを覚えていています。

また先生は、「時間」に厳格な方であるだけに、学生が遅れて教室に来ることを、非常に嫌がられた。先生は、学内にいらっしやる時も、普段は、物事かな方でしたが、いったん

ん授業をお始めになると恐ろしい程早口で喋りつづけられるのでした。この調子で百分間みっちり講義をなさり、疲れた表情を少しも見せられず、その後、私たちに向ってこう言われた。

「もっと疲れないさい、一日みっちり講義を受けて帰れば、くたくたになるのが当然だね。」

先生は、私たちに疲れることの貴さと、学生の本分をお示しになろうとなされたのです。

また先生は、講義中によく孔子のお話をなさいました。恥ずかしいことに、今の私にはほとんど忘れてしまいました。次の一言だけ、どうにか覚えておきます。

「一を聞きても十を知る。」

これは、孔子と弟子の子貢との対話の一節であります。

「一を聞いて十、先のことから分かんなくとも、せめて二つ三つ先のことを読み取れる者になりなさい。それには訓練が必要だ、訓練次第で鉄砲の弾も止まって見える。」と。

当時は未熟であった私にとって、このような有り難いお話も、まるで中国の山奥に住む、仙人が千里眼をもった超人の話のようにしか聞きとれなかったのです。だが、これらの話は特別な、超越的なものと受け取ってはならないのです。むしろ、私たちに与っては、心の琴線にふれるものであります。

このように、大園先生は、いつまでも私たちに「よき師」として、また、神の国へお導きくださる「神父様」として、私たちの魂から永遠に離れ去ることのないお方でありましょう。

大園神父を憶う

大西 忠 雄

(フランス文学科長)

本学副学長故大園神父はかねて病
氣御療養中のところ、去る五月二十
八日ついに不帰の客となられた。実
は五月の初めご容態が悪化し、きゅ
うきよ 御入院と聞き、ひそかにご案
じするとともに、ひとえにご快復を
念願していたのに、このような結果
となり、まことに悲しみに堪えず、
謹んでご冥福を祈る次第である。

故神父は副学長の役職の他、本学
仏文学科の教授として、仏語・仏国
宗教思想史等を講じておられた。本
学に奉職以来すでに数年以上にわた
って、ともに教鞭を取ってきた私と
しては、同神父この度のご世界が惜

大園神父様の思い出

寒 川 修 吉

(英文学科卒業生)
(英知大学勤務)

初めて大園神父様にお目にかかっ
たのは、昭和四十四年四月、私が英
知大学に入学した時であった。入学
式当日のミサでの神父様のお説教が
今も強く印象に残っている。それは
大学生活の心がまえについてであつ
た。人生の縮図ともいわれる大学生
活を、やたらと楽を求める安易なす
ごし方ではなく、常に自分自身に鞭を
打ちながら学問的な苦しみを求めて
いく態度でなければならぬとの趣
旨であった。今、大学生生活を振り返
つてみると、この時の神父様のお話
は、ともすれば自分に甘え、怠惰に
流れがちな私の四年間の大学生活を
支えて下さった様に思える。

大学の一般教養で宗教学を教えて
頂いたが、回を増すごとに熟ぼくな

しまれてならない。学校でのお付合
のほか、両三度用談をかねて私は園
田教会を訪ねて、玄関わきの殺風景
な待合室では半時ほど故人と親しく
お話を交わす機会を持った。ざっく
ばらんな、意外と下情に通じておら
れた神父のお話は、話題も広く面白
かった。卒直で時に辛辣な皮肉も吐
かれたが、そこに深刻じみた暗さが
感じられないのは、明朗な故人の人
柄によるものと思われた。前記のよ
うに故神父とお付合は必ずしも短
かくはなかつたのだが、故人の天職
である教会関係のお仕事やご布教活
動等については、私は殆んど知るこ
ろがなかつた。またこの方面のお
仕事の成果として残して逝かれた。
信仰・神学上のご思索・ご研究の業
績に關しても、私は未だ詳かにして

ってゆく新鮮で独創的な講義は私達
学生を魅了してやまないものであつ
た。当時の神父様は四十代半ばの壮
年学者であられた。私はその頃、学
者というものがどの様なものか全く
分らないままの学生であつたが、神
父様から初めて学者のイメージを印
象づけられた様に思う。それはいか
めしく、やや近より難い感を与える
イメージであつた。

そのイメージが次第に崩れていっ
たのは、大学卒業後、教会あるいは
知人宅で聖書のお話を聞かせて頂く
ようになってからである。博学で世
間の出来事にも絶えず関心を抱いて
おられた神父様の口元から次から次
と機関銃のごとくあふれ出る興味深
いお話は私の知的好奇心を駆り立て
てやまないものであつた。私の様な
不肖な弟子にも、いつも暖かく裏表
のない態度で接して下さり、「日常
おこりうるあらゆる事象に対しては
常に中庸の精神であつたり、優等生的

いない。いづれご病氣も快復しお元
氣になられた暁、改めてお付合を深
め種々ご教示を得たいものと期待し
ていたのに、この望みも永久に失わ
れて、何とも淋しい限りである。
ともあれ故神父が私共のため残さ
れた貴重な業績の一つに、私は故人
ご生前の創作にかかる英知大学の学
歌を教えた。そこには詩人大園神
父の面目と、国文の語法・漢語に対
するご素養とおのずから窺われる
のであつて英知大学の存する限り、
本学学生及び関係者によつて、本学
歌が作者とともに、末長く歌いつが
れ語りつがれることを、私は改めて
祝福したい。大園神父よ。安らかに
ご永眠下さい。

で要領のよい人生を送るのではな
く、言葉と行いの調和、自分の身辺
は絶えず整然と整頓された状態にな
ければならない云々」と説いておら
れた神父様こそ、まさしく言葉と行
い、信仰と業の伴われた方であられ
た。

今年の二月、姫路聖マリア病院に
お見舞いに行った別れ際に、アグネ
ス・チャンの歌が入ったカセットテ
ープを買ってくる様に仰せつかつ
た。あらゆる音楽に類ない興味を抱
いておられたとはいへ、神父様が
アグネス・チャンファンであるこ
とに少し意外な感じがしたが、御要望
のカセットテープをお送りしたところ、
早速、封筒に記念切手を所せま
しと貼った心のこもるお札状を頂い
た。そのお札状があまりにもユーモ
アあふれる文面だったので、天国に
おられる神父様の特別のお許しを得
て、一部を公開させて頂く。「……
ああそもこれは天使の声をもった白

衣の精霊か、かの冷え切ったフアウ
スト博士の血でも逆流させかねない
天来の鈴をふるようなアグネス・チ
ャンの歌声をとどけてくれるなん
て。しかも、カバーにはあのあどけ
ない顔がじつと僕一人を見つめるが
ごとく、今もすぐ近くの書類箱の上
にのせた柙の上からじつと微笑みか
けてくる。よく見ればそのくせのな
い柔らかな髪を止めた白いピンには
小さい花柄の模様さえも見分けるこ
とができるではないか。もし彼女が
自分の好みでこのヘア止めを買っ
たのであれば、まだしも我慢できる
のがこれかもしれない。いかす男性のプレ
ゼントであつたとすれば誰が心平ら
かでいられるか。」

今にして私の心にほのぼのと伝わ
ってくる神父様の暖かいユーモアの
中、私は人生とは何か、人のつと
めとは何かを改めて教わる様な気が
してくる。神父様があまりにも突然
に逝かれてしまった今、あの豊かな
学問的風格にもう二度とお目にかか
ることが出来ないのだと思うと本当
に悲しい。
神父様のご生前の数々のご恩に感
謝し、ご冥福をお祈りする次第であ
る。

生死さえも超えた永遠に
中 村 満 子
(フランス文学科卒業生)
(聖母女学院勤務)

「4月13日4時、八坂神社狛犬の
前で」と約束して、春の宵のひとつ
きを、聖マリア病院からの退院祝
いの食卓を囲んで過ごした。そして15
日付で、最後となった手紙が届い
た。
「……芭蕉や啄木や尾崎放哉の死も
その忌日を中心にその人の生涯を追
体験する私は、イエズス様の死去を

囲むこの聖週間を特別な意味でキリ
ストと共に生きるように過ごすので
すが、そこには決して惨めさや悲し
み、絶望は支配せず、弟子達もそん
なに御苦しみが切迫しているとは夢
にも思わないくらい、マルタやマリ
アの接待を楽しまれ、かねてから弟
子達を愛しておられたが最後の晩餐
を迎えて極みまで愛し給うたと書か
れるような生命への意志と喜びの極
地にまで達しておられるのです。そ
うしたことを思うと13日の夕食はこ
うした意味でも実にふさわしいとい
う一歩だったと思います。「春宵一刻
価値千金」といいますが、その上に茶
道の一期一会の緊張を加え、更に信
仰の世界の深みも合わせて与えてく
れるような一刻でした。私の母はと
ても感激家で、初めて海を見た時、
『もうこれで死んでもいい』と言っ
たそうですが、私もあの晩は心の中
ではそう思っていました。」

あの夜大園先生の胸に去来してい
たものは……。今思い返すと、確かに
「あと三月」とか「秋まで」という
言葉が口にされたように思う。とこ
ろが、私の中の強い否定の気持ち
が「五年」という言葉の方だけを残し
てそそくさと意識下に沈めさせてし
まっていた。いつかの手紙に「……
淋しさは花のあたりのあすならふ」
といった離れゆくことの感慨があり
ますが、あなたの方から何の屈託も
なく好意を示して頂くとうれしいと
思います」と指摘されたように、師
の思い、苦しみを察しえない私は、
まさに何の屈託もなく、ゲッセマニ
の園で眠ってしまった。
5月7日、「再び敵の軍門に屈し
ました」という突然の電話に、9日

一期一会

長谷川 桂子

(短大宗教科卒業生、修道女)
今日別れ 明日は逢ふ身と思へども
量りがたきは 命なりけり
良寛

大園神父様、あなたはとうとうこの郡山の地を訪れずには、遙か神の国に召されて逝かれましたね。

この春、郡山、会津若松、福島など、ごゆっくり、みちのくの鄙びたいで湯に湯治していただき、水と山と人の美しさ、力強きなど、ついで聖マリア園の四十五名の子供等も保母も、みんなみんな今日か明日かとおあなたをお待ちしておりましたのに……。

神父様、あなたがこよなく愛された阿多多羅山は、今日も澄みわたる青空の下で美しいたたずまいを見せています。

かつて八年前、私が英知を去る時、学長室であなただは三高の校歌を歌って下さり、続いて郡山に行く私に、智恵子抄の樹下の二人を読んで下さりました。その時の私には智恵子と光太郎のことより、英知を去ることの辛さでいっぱいになっており、阿多多羅山と阿武隈川ってそんなに素晴らしいのかな？位で聞いていました。

あれが阿多多羅山
あの光るのが阿武隈川。
東京に生れて育ち、さらに心のふるさと園田に住んだ私には、冬の長い東北、骨身にしみる北風、語尾が強いこの地の方言など、全て異和感がつのるばかりでした。
そんな時、神父様からのお手紙に

は、風土と人、文化と宗教、土地と信仰などいつも現実の中で高い理想を、理想の中で着実な生活をごく身辺的なことから、心の琴線に触れるような珠玉なことばで語りかけて下さいましたね。そんな後では校庭に飛び出して北国のひんやりと澄んだ空気をいっぱい吸い込んで、安達太良山の稜線をいくたび仰いだ事でしょう。朝に夕べに眺めていたあの絵のような山が、私の内に何時のまにか変容し、そこに寄り添う智恵子と光太郎の、生き死にの姿が思い浮びどんなに辛く孤独な時でさえ、愛す



ることの具体的な力をして汲みとっていくようになりました。それが単なるセンチメンタルズだなどとおっしゃる方があれば、どうぞお笑い下さいませ。信仰の浅いいたらぬ私には、超人的聖人位からは汲みとり得なかつた、最も人間味あふれ、地についた力強い信仰の宝をどれほど豊かにいただいた事でしょう！
省みれば、公立の小・中・高校を卒業し、およそ十年、資本主義に洗われたあのエネルギーシユなM商社のB・Gでした私は、主人にするなら東大生、海外勤務の営業マン。商

品買うなら高島屋、三越などの高級品など、あらゆる世界に心を馳せ、己を偽り、レッテルばかり追い求める事大主義者のフアリサイ人でした。そんなおろか者だからこそ、あえて主は私をお召し下さり、この道に真実生るるように、心の深いところで求めて止まなかつたものを、充分お与え下さいました。

英知での二年間は何といつてもこんな私の価値観を全部はぎとって下さいました。神父様は、キリスト教の歴史性と、西洋的キリスト教から東洋的キリスト教への脱皮、さらにこの風土、この文化、この人々との交りの中に生きるキリストというプロセスを通り、信仰の現実化(incarnation)というところまで導いて下さったことを何と感謝してよいか解りません。そして中心は一粒の種子が地に落ちて腐ってこそ、根をおろし花をつけることでした。おろか者には幾度となく主を裏切ろうと強い誘惑もありましたが、やはり心の深いところから、「主は、私がここに根をおろすようにと望まれたのに、もしもそれをこぼんだら一体何時花が咲くでしょう」「生命は滴びたものでなく生きて成長して行くものだ」というこのあなたの教訓は、主のみことばを文字通り生きられた方のみ真実力がこもりました。

さあ、今こそ二人で阿多多羅山を観に行きましょう！
あれが阿多多羅山
あの光るのが阿武隈川
かうやって言葉すくなくに坐っていると、

うっとりねむるやうな頭の中に、ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。
この大きな冬のはじめの野山の中に、
あなたと二人静かに燃えて手を組んでいるよろこびを、
下を見ているあの白い雲にかくすのは止しましょう。
あなたには不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせて、
ああ、何といふ幽妙な愛の海ぞこに人を誘ふことか。

「樹下の二人より」
神父様、大園神父様は生きていらつしやる!!
私の魂をゆさぶるこのリアリティは一体何でしょう。今迄何かにつかえていた壁がくだけ、全く新しい潮がみたされるのをどうすることも出来ません。
そうです。あの山麓の二人の詩の最後の二行が実感となって、私自身の内に在るのです。
わたしの心はこの時二つに裂けて脱落し、
関として二人をつつむこの天地と一つになった。

現身の人なる大園師を失った時、主はあふれるほどの恵みで師を栄光に入れられ、永遠の人となられた神父様を、私達の心につかりとつかませて下さったのです。
すなわち、神は私達を世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、み前で聖なる者、愛に生きる者にしようとなされました。」(エフェ一・四)
みちのく郡山にて
無原罪聖母修道会

我が国の禅宗の二大流派の一つである曹洞宗の祖 道元禪師（一一〇〇—一二五三）は私の敬愛する人物の一人だが、彼の弟子懐英が筆記した道元の語録、正法眼蔵隨聞記が私に再読、三読してあきない名著の一冊である。

その中には学道の人と与える数々の教訓がのべられている。もちろんその中で一番強調されているのは清貧の徳である。学道の人はずっとも貧なるべし。学道の人、衣食を貧ることなかれ。学人、人の施しをうけて悦ぶことなかれ。などの項目がずらりとならんで道元はこの求道の最大の妨げに対して警告を怠らない。

またそれについては、イエズスも弟子達に言われたように世俗の欲や名譽は勿論のこと、父母兄弟に対する人情さえも捨てなければならぬことを説いているのはさすがである。

ところがそれとらんで、道元は学問、知識までその求道に妨げあるものとして捨てるべきことを要求しているのにはいささか驚かされる。

たとえば、卷二の三には「広学博覧はかなふべからざるなり」という題がかかげられ、また、卷三の九には「学道の人、世間の人に知者もの知りと知られては無用なり」と言い切っている。ひろく書物をよむことなを際限のないものである。すべて思い切って止めるがよいと言ひ、また人にあなどられたいくないと考へて物を知らうとして広く仏教やそれ以外の古典を学び、さらには世間世俗のことまで知らうと思つて勉強した

り、人にその知識を見せたりするのはとんでもない間違いである。仏道を学ぶためには真実に無用なり、とも言っている。

ところが現在の私が努力していることは、まさに道元がしてはいけないと禁じている古典の研究であり芸術の鑑賞である。禁じられた遊びではなく、ここにまた一本の知識の木が、そしてそこにみえる文化の果が禁断の木の実として示された思いがする。

文化と宗教とはたやすく両立併存できるものではなく、むしろその内、部にこのように深いジレンマを含ん

信仰と文化

—— 徒学に賭ける

大園 義興

だ要素である。

たとえば右にあげたようなきびしい戒告を与えた道元自身が誰よりも青年時代に学問に熱中し中国語の天才とされたわかれ、また後に正法眼蔵の主著をあらわした時、それは日本中世文学の異色ある傑作として古典の仲間入りをする皮肉な現象も見ている。

イエズス御自身も、ピラトに対して、「我が国はこの世のものにあらず」と言われ、また「だれも神と富とに同時に仕えることはできない」と言われた時に、ただ政治と経済だけを排除されたのではなく、同時に信仰と文化が両立しないことも強調

されたと考えられないこともないのである。

隨聞記の中には次のようなエピソードも語られている。あの有名な保元、平治の戦の立役者の一人であり平治の乱のはじめに源義朝によって殺された藤原信西の子供の一人である明遍（一一四二—一二二四）は最初真言僧として出発しやがて天台、真言の両派に通ずる高僧となつたが後に法然（一一三三—一二二二）に教化されて念仏に帰依した。それから彼は、学問研究の僧がやつて来て質問しても「皆忘れおわりぬ、一事もおぼえず」としか答えなかつた。

道元はそれを評して、このような人こそ、道心の手本であろう。明遍は知らないはずがないのだ。しかし無用な問答はしなかつたのだ。およそ信仰の道に志す人はこの気持がなければならぬ。よしんば以前からの学問があつたとしても全部忘れてしまふのが立派なのである。ましてこれから学問に気を散らすことは決してあつてはならない、宗教書でさえも本當の求道にはむしろさまたげとなると言い切っている。

先日もあるフランススコ会の神父の話の人から聞いた。その方は自分の私物としては本一冊も持たず、転

勤を命ぜられても一着の修道服とお祈りの本だけで出発できると聞いて感嘆に絶えなかつた。

正直に言つて、今のところ私はそのような生活態度は絶対にとれない。今私の手元にある千冊の本、百枚のレコード、一司のピアノを置いて私はどこに去ることが出来るだろうか。極端な言い方をすれば、持っているものならば天国の雲の上までも、また地獄の底までもこれらの文化財は持つて行きたいと思うほど



である。

ところが人間の存在を歴史的に観察すればこの信仰と文化という二つの要素は互いに否定し合ひながらも離れようとして離れ切れず、むしろ互いに他を必要とし他を生み出してゆく母体になるといふ弁証法的發展を繰り返している。

日本における仏教、アラビア世界におけるキリスト教。それらはすべて

の世界に固有な文化の花を咲かした最大の原因ではなかつたか。文化を超え、文化を否定する精神の中から目覚しく復活し發展する文化の力。この破壊と創造との循環を、人のなった業による無限の罰、結局は大人の演ずる賽の河原の石積みと見るべきだろうか。

私はそうは思わない。人はどこまでも有限な存在であり、私達はこの有為転変の世の中に生き働く外はない。そして見方によっては学問芸術等の高度の営みは、ただの人間生活を支える働き以上に深くこの時の流れの空しさを痛感させられるかも知れない。

どうせ滅びるものならば、なまじ努力はすまい、精緻をこらすことはすまい。深い思いをかけることはすまい。愛することの深ければこそ失うことは苦しいのだから。このように考へて真善美への肉迫をわざと停止しようとする気持も私には分りすぎる程よく分かる。

にも拘わらず私はその滅びゆく必然を百も承知の上で、しかも自分の働きが永遠にほろびぬものであるかのように振舞うことの中に、精神を与えられた人間の精髓を見いだすのだ。

一昔前までの教会での物の考へ方や話し方の中には、この世の無常の故に、この世の営みをすべて否定して、直ちに超自然の世界に生きよとすすめる傾きがあつた。しかしこの頃になつての私の考へ方は、もし無常なるものを常なるもの如くに考へたり、希望しての働きであるなら

ば、それは迷いであるとも空しいとも言えようが、そうではなくて、心に何の迷いもなく、執着するところもなく、則天去私の気持で、自分の地上的生命の可能性のかぎり花と咲かせるならば、それこそ神のみまえにも人の見る目にも、もっともいさぎよく美しく、充実したものでないかと思えるようになってきた。

少しむずかしくなるがこの辺の真理をもう少しさぐってみよう。

永遠と時間の間には無限の距りがある。もしその一方に有という名をつけるならば他方は無と名づける外はない。私達が永遠を基準として生きるということは、したがって一切の支点を失って生きるということになる。普通に考えられる動機を全部失った上で、その無根拠の上になんかの努力を傾けるということ。それが信仰をもって生きる人、すなわち永遠の生命を基準としてこの世に与えられた命を生き切る人の覚悟であろう。

時間が有限であること、変化することは百も承知なのである。ひょっとしたら自分の努力はその成功直前に覆がえされるかも知れないというようにおそれるかも知れないと不安定な未来にやってくるかも知れぬとおそれられているのでなく、はじめからおわりまでほろびこそすべての根底であると覚悟した上で、いま命あるかぎりそれを十二分に燃焼させずにはいられない生命への意志、私はそこに人生の、そして人生の中から咲き出る文化の原点を見いだすのだ。

昨夜N・H・Kテレビで壇浦における平家滅亡の解説をみていた。その中で仏教研究家の梅原猛氏が円地文子さんとの対談の中で、へなへな腰の思い切りの悪い標本のような総大将宗盛に対して、勇気もあり、見通しも正確な弟知盛卿の性格を推賞しているのを聞いた。

五年以上にわたる抗争、一年以上の海上生活の末に、この元暦二年(一一八五)三月二十四日の長い長い一日は漸く終わりに近づき、西方に傾く太陽とともにあわれ榮華をほこった平氏の一族はことごとく海の底に沈もうとしている。その時知盛は自分の船から小舟にのり移って『御所の御船に参り、「世の中は今ほかうと見えて候。見ぐるしからん物どもみな海へ入れさせ給え」と言つて艦から舳と走り廻り、掃いたり、拭いたり、塵拾い、手づから掃除せられけり。』と平家物語には描かれている。

私はその知盛の心境こそ文化人の心の典型のように思う。時勢は非である。平氏はいかようにもがいても今は滅亡の奈落におちる外はない。そのすべての名誉も命も失われようとするときに、一年あまり乗りならした船の中の生活の汚れぐらいが何であらう。清かろうと汚れていようと、どちらでも同じことだとあなたは考えるだろうか。それならばあなたには文化人としての心が無いのだ。

めづらしき東男に乱入された時平氏の公達の船の汚れを見られることが知盛の貴族的魂は我慢することができなかつた。手ずから掃き拭い塵拾うて、名香をたきしめたる鑑二領を

重しとして身に著けて入水する。それはそのまま最高の名優の演技ではないか。

人は美しく滅びる時に、滅びの世界を超えているのだ。文化とは美しく移ろい行く人の知恵であると言つてよからう。

あと二つばかり信仰に生きる文化人の実例を上げよう。

その一つは千二百年にわたる東大寺金堂(大仏殿)の歴史である。その金堂は聖武天皇の勅願により紀元七四五年に起工された。そして良弁僧上や菩提達磨の努力も去ることながら特に行基菩薩の絶大な民衆への影響力を助けに借りて今日の大仏殿に倍する巨屋を七五二年に完成することができた。

しかしこの大仏殿は一一八〇年に平重衡によって焼かれてしまった。後白河法皇はその再建を願って法然に依頼されたが、法然は自分の力の足りぬを知って自分の親しい重源(一一二一—一一〇六)を推した。重源は自ら全国を廻って材木をえらび、浄財を集め、工事を監督して苦節十五年、新大仏殿を完成した。

再度この大仏殿は戦国時代の一五六七年に松永久秀の手によって焼かれた。時代が下ると共に人々の器量は低下する。今度は行基、重源のような偉材を見いだすことができず、大毘盧遮那仏は百数十年も雨ざらしになっていった。

その時三人の若き僧侶がそれぞれ自分達の一生の抱負を語り合っていた。公慶(一六四八—一七〇五)は大仏殿の再建を、鉄眼(一六三〇—一六八二)は大蔵経の刊行を、山

道白(一六三六—一七一五)は衰えた曹洞宗の宗風を復古することを誓い合った。それから五十年、大仏殿は公慶らの三十年にわたる努力の結果一七〇九年に到って三度その巨姿を若草山のふもとに表わしたのである。公慶自身の上棟式は見る事ができて落慶の喜びは見る事となしに遷化している。

こうした例は東大寺本堂だけではない。日本における一一〇〇の国宝の一つ一つの背後にはこのような生死盛衰をはるかに超えた不退転の生命への意志があったことだろう。幾たび燃えて灰になろうとも、その明る朝にまだ一つの魂が息づいていれば再び空高く築いて行こうとする文化建設への意志、それはそのまま神の創造の意志につながるものがあるのを感じる。

私は奈良に遊び東大寺の甍を仰ぐたびに千二百年の信仰人の営みを思つて涙なきを得ない。ちなみに公慶と将来を約した他の二人もそれぞれの所懐をとげた。鉄眼がこれにまた巨資を必要とする大蔵経の刊行にのり出して漸く必要資金を集めるたびに大飢饉に際して二度まで難民救済のために財を散じて三回目にしてようやく刊行の大事業をなしたとげたのも有名な事実である。

さいごに私の好きな音楽の歴史から引こう。ヨーロッパで一七八九年から一八一五年まではフランス大革命からナポレオン戦争につづく大動乱の時期である。この間特に隣国のオーストリアは一七九三年断頭台上

の露と消えた女王マリー・アントワネットの祖国でもあり絶え間のない革命と戦争の脅威にふるえたことだろう。その間を縫ってモーツァルトハイドン、ベートーヴェンの傑作はつぎつぎに生み出されている。国家的危機だけでなくモーツァルトは貧しさと病氣と、ハイドンは老年と、ベートーヴェンは失恋や耳の固疾に自殺したい程の誘惑と戦いながら不朽の傑作を生んで行った。今日ナポレオンの砲兵隊の硝煙は消え去り、彼の拡張した国境もみなもとに復して、彼の戦場の名前を知る人も少ない。それにひきかえ、モーツァルトのレクイエム、ハイドンの天地創造、ベートーヴェンのレオノールや田園は今日も世界中の人々に平和と美の国への招待をつづけている。

信仰は文化に対して両刃の剣の役割を果たす。文化が自己満足に陥ち入り、特にそれが権勢や富に支えられたり、それにおもねっている時に信仰は仮借なくその文化の空しさを暴露しその仮面をはいでゆく。しかし逆に人々が戦争の破壊のあとに茫然自失し、または自分自身の無力やはかなさに打ちひしがれている時に、不思議な永遠の価値への可能性を私達の目の前に開き示してくれるのだ。

「天に在す御父は今日も休まずに働きたもう。私もまたどうして働かずにいられようか」(ヨハネ五章十七節)

「神よ、我らが文化的業を御手に委ねます」

「声」誌一九七〇年七月号より
(「声」社編集部認可)

故大園義興教授の業績一覽表

「声」誌に発表された論文・アーティクル



生活の設計 一九六一年 一月号
 声誌の一〇〇〇号を迎えて 同 四月号
 静かなる献身、父性愛の美しさ 同 五月号
 神道とカトリック 同 六月号
 儒教とカトリック 同 七月号
 仏教とカトリック 同 七月号
 プロテスタントとカトリック 同 九月号
 こんな人になりたい 同 十月号
 こんな人になりたい・今の世にあ
 らまほしきこと 同 十一月号
 あらまほしきこと 同 十一月号
 マキシミアノ・M・コルベ神父
 の真の幸福 一九六二年 一月号
 知られざるキリスト① 同 同
 スカポロ宣教会創立者 モンシニ

ヨール・フレージャーのおもかげ
 「立枯れる宣教師」 同 十月号
 現代のクリスマス―大阪乳児院訪
 問記― 同 十一月号
 聖体の聖人 聖エイマール① 一九六三年 一月号
 聖体の聖人 聖エイマール② 同 二月号
 聖体の聖人 聖エイマール③ 同 三月号
 御受難節によせる現代的コント
 ー睡(つわぶき)―ユダヤ人のゆ
 るし 同 四月号
 愛の母なる聖マリア 同 五月号
 去り行く友のために 同 六月号
 ヨハネ二十三世のひろい心 同 七月号
 ローマ聖座に新風を呼んだヨハネ
 二十三世(訳) 同 八月号
 鶯の鳴く声絶えぬ―故ウッセン師
 をしのぶ― 同 九月号
 死の針よ今いざこ 同 十一月号

日曜の黙想、御公現第二の主日
 彼等に酒なし 一九六四年 一月号
 日曜の福音の黙想 同 二月号
 聖マリアのお清めの祝日 同 同
 アメリカの生んだ初の聖女 同 同
 マザー・シートの伝記― 同 同
 義人 高山右近 同 同
 アメリカの生んだ初の聖女 同 同
 マザー・シートの伝記―(完) 同 同
 使徒聖バルナバ 同 同
 聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ 同 同
 若きアウグスチヌスの二つの回心 同 同
 下女の模範 聖女ノトブルガ 同 同
 癩病者の母 聖女ヘドヴィジス 同 同
 喜こばれる信者、喜こばれない信
 者 同 同
 教会の分れる時、プロテスタント
 の場合 一九六五年 一月号
 教会の母なる聖マリア(訳) 同 同
 キリストの福音と生きる現代人
 (訳) ジャン・キットン著 同 同
 新しき酒は新しき皮袋に 一九六六年 二月号
 現代人における第二バチカン公会

議のメッセージ 同 同
 布教に関する教令解説「主よ救い
 給え、我等ほろぶ」 同 同
 地のおもては新たにならん 同 同
 悲しそうな顔を見せないように 一九六七年 二月号
 汝、対話すべし 同 同
 職場の中の信仰 カルダイソ枢機
 卿述 同 同
 修道生活と布教 同 同
 真実と偽りと―東洋と西洋と八上 同 同
 真実と偽りと―東洋と西洋と八下 同 同
 人間の美と魅力について―荘子・
 法然・観阿弥・ベーコン・ニーチ
 ェより― 一九六八年 一月号
 行く春や―死は愛よりも強し― 同 同
 悲願 同 同
 なんじの敵のために祈れ 同 同
 親を思う 一九六九年 二月号
 インド人の宗教―ハラッパ―文化
 について 同 同
 よろこびのおとずれ「我は地にて
 遊ぶをたのしめり」 同 同
 読書紹介『ヨブ記』 一九七〇年 一月号
 自己を耕す 同 同
 教会がこの世から受けるもの 同 同

信仰と文化―徒勞に賭ける― 同 同
 夏の夜の夢 同 同
 聞くよしもがな 同 同
 クリスマスを生きたる 生と死の戯
 れ―天才と狂気との間― 同 同
 万葉の旅 木人乏母―きびとと
 もしも― 同 同
 二人の狐独者―詩と真実― 同 同
 万葉の旅 去来帰奈―いざ行か
 ぬ―北国の冬の幻 同 同
 傍に立つ人々―日本切支丹史の一
 側面― 同 同
 万葉の旅 水莖の水城の上に 同 同
 万葉の旅 若鮎釣る妹がたもと 同 同
 夢幻の季節 同 同
 如何是祖師西来意―東洋的求道
 の諸相― 同 同
 如何是祖師西来意―東洋的求道
 の諸相 同 同
 万葉の旅 阿豆麻波夜(あづまは
 や) 同 同
 万葉の旅 紅は移ろうものぞ
 ー夫婦相和し― 同 同
 ヴェトナムに平和を 一九七二年 八月九月号
 齋り心―信仰を忘れなかった平安
 朝の人々― 一九七三年 一月号
 悲しみの王子 聖徳太子 同 同
 同心の王子 聖徳太子 同 同
 肉親の争いに耐えて平和を求めた

追憶の王子 同 三月号
 聖徳太子(その3) 同 四月号
 好漢 餐を加えて自重せよ 同 五月号
 礼節を知る人 安並博士の追憶 同 五月号
 朝の想い 同 六月号
 新しき礼節の時 同 七月号
 万葉の旅 見すべき君がありといはなく 二上山を仰ぎて 同 七月号
 万葉の旅 草枕 旅にしあれば 同 十月号
 万葉の旅 君を離れて恋に死ぬべし 同 十一月号
 万葉の旅 君が弓にもならましものを 同 十二月号
 生きていることの難しさ 一九七四年 一月号
 ガラシア夫人ゆかりの地 味土野の冬 同 二月号
 万葉の旅 嶋の宮 勾の池の放ち鳥 同 四月号
 万葉の旅 石ばしる垂水の上のさ蕨の 同 五月号
 万葉の旅 うらぶれ立てり 三輪の檜原は 同 八・九月号
 万葉の旅 眞幸くあらば また還り見む 同 十月号
 日本人の心と人生の果て 行き行きて たふれ伏すとも萩の原 同 十一月号
 万葉の旅 浦なしと人こそ見らめ 柿本人麻呂終焉の地を訪ねて 同 十二月号
 冬の旅 夏の夢 一九七五年 一月号

「嵯峨日記に憶う」(2) 二月号
 冬の旅 夏の夢 同 三月号
 「嵯峨日記に憶う」(3) 同 三月号
 禅定法皇行脚事 同 四月号
 雪の常照皇寺を訪ねて 同 四月号
 君がかんばせ美しきがゆえに 同 五月号
 我が庵は難波の乾 同 五月号
 「旅せざるの記」 同 六月号
 順逆の才 岡田三郎助と青木繁 同 七月号
 順逆の才 岡田三郎助と青木繁 同 七月号
 日本の福音化の諸問題 同 八月・九月号
 人間の場 同 十一月号

図書館・チャペル建設
 起工式挙行される
 去る六月二十二日(火)、午後四時三十分より運動場において、小雨の降る肌寒い中を田口枢機卿、安田理事長をはじめ、教職、事務職員、関係者らが多数列席して図書館及びチャペル建設の起工式が行われた。まず司会の井上博嗣助教授が開式の辞をのべたのに続いて、混声合唱団による聖歌が歌われ、学生課長の中野正勝講師が聖書朗読をした。つづいて岸英司学長が挨拶をのべたあ

森本雅美さん(英文学科二回生) パラリンピック 日本代表に決定!
 今夏、カナダのトロントで開催される第二十五回パラリンピック日本代表(三十八名)のひとつとして、本学英文学科二回生の森本雅美さんが選出された。
 大阪の長居スポーツセンターで車イスのバスケットをはじめたのがきっかけで、昨年の十一月、兵庫県の子の競技大会に出場。その時のタイムがよかったので、スポーツセンターの推薦を受けて、このたびの栄誉を手にした。
 出場種目は「スラローム」と言っ

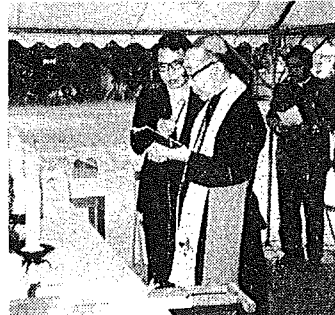


と、本学の創立者である前学長の田口枢機卿みづからの手によって祝別がなされた。その後、田口枢機卿、安田理事長、岸学長、藤木工務店社長、山岸学生会長、山口満雄後援会長らの手によって鎌入、鋤入、鋤入の各式が行われた。つづいて聖歌合唱、応援団によって英知大学歌が歌われ、井上助教授の閉式の辞をもって幕を閉じた。
 いよいよ降り出した雨に、うらめしそうに空を仰ぎながら、誰かが口にした言葉が印象的だった。「雨降れば地固まる」と。

選ばれた感想は「今だに実感がありません。普通、国体に出場してからは、その点ラッキーでした。海外に行けるといってもまたとないすばらしいチャンスです。」と目を輝かせた。
 今度の大会に臨む抱負としては「行ったかぎりはメダルをねらいたい」と闘志満々。森本さんの場合、必ずしも「参加することに意義がある」だけではないさそう。
 また養護学校で青春の一時を過ごした森本さんは本学を色々な面で興味と魅力のある場だという。「これを機会に、自分の可能性、人間性の開発のためにも自由な時間が多いうちにいろいろな体験をしたい」と積極的な森本さん。その表情は底ぬけに明るいのである。
 彼女は七月三十日の夕、大きな夢と希望に胸をふくらませながらカナダへと飛び立つ。
 森本さんに心から拍手と声援を送りたい。

英知通信
 昭和五十一年七月一日発行
 編集 英知大学
 発行者 学長広報室
 兵庫県尼崎市若王寺苗田
 (06)四九一―五〇八三
 六六一

○佐伯わか子教授 (英米文学) はすでに前号で公示したようにロバートラッセル著「天使をこの手に」―光の世界を阻まれた一人の記録―を翻訳した。本書を読んで非常に感銘を受けた一主婦の感想が「くらしの手帳」(くらしの手帳社出版)第42号「初夏号」に掲載された。
 ○井上博嗣助教授 (英米文学) は、七月十日付で、芦屋の精道教育促進協会よりエリッヒ・ヨッフム著「性と教会」性についてキリスト教的見解」を翻訳出版した。本書は、性道徳の混乱のさ中において純潔を守るために雄々しく戦い、人間としての品位を保つことの必要性とともに、神からの賜としての性の持つ神秘と崇高性、および性教育の重要性を第二バチカン公会議が打ち出した指針に則って説いたものである。



研究室便り
 染田秀藤助教授 (イスパニ)